

Arise

～Exceeding the ninety nine ages～

風野旅人

旅人のザック

■ 1 プロローグ 目次

8 7

—それは世界の片隅で紡がれる、
大きな物語へと続く小さな物語—

かつて——この線路はどこまでも続いていった。

我は、いや我らの同胞達もこの線路を伝わり、まだ見ぬ世界へと旅立っていった。
幾年も同じ場所に止まり続けることもあれば、明日どのような場所に行くのかすら分からない時もあった。

いつまでも続くかと思うほど、我は長い『とき』を過ごしてきた。

だがそれも……終わる——もう間もなく——

窓から差し込む日差しと吹き抜ける風が、窓枠に突き立てた肘とそれが支える顔を強く撫で続ける。

もう何時間、こうして風に身をさらし続けてきただろうか？

ボックス席の窓際を陣取り、目の前に他の乗客が居ないことを良いことに、膝を存分に伸ばしていたのはもう十時間も前のことに感じられる。

そもそも、目の前どころかこの車両には他に乗客はいなかった。ずいぶん前に通り過ぎた集落の無人駅で客を降ろしてから乗り降りした人間を見た覚えがない。

「ふあ……さすがにこんなただっ広い草原のど真ん中じゃ、回線は繋がるよしもないな……」

唯一の乗客である青年が、口から吹き出ようとしていた欠伸を中途半端に嘔み殺しながら呟いた。

その膝の上ののせているコンピュータ端末を二つに閉じたのは、先ほどの集落を過ぎるよりも遙か前である。

それからはずつと移りゆく窓の外の世界を眺めることに従事していたが、さすがにこうまで何ももない、変わらない風景を眺め続けることをこの青年の忍耐に要求することはかなり難易度の高い要求と言わざるを得ないだろう。

青年の年の頃はまだ学生といったところだろうか。細身で質素な出で立ちに眼鏡というおよそアウトドアなどという言葉には全く無縁と言っても過言ではない印象を受ける。

唯一目を引くのは、首から提げられている翡翠色の石がはめられたペンダントだろう。それは日の光を浴びて瞬くように煌めきを青年の胸から放っていた。

「そんな眠そうな顔してないで、シヤンとしてなさい。シヤンと」

青年しか居ないはずのその場から、不意に勝ち気そうな少女の声が響き、青年のだらしない様相を叱責する。

「んなこと言ったって、眠いものは眠い。こんな広いだけの野原を眺めていたって、原色バリバリの野外サーカス団が現れるわけでも、昼間っから花火が打ち上がるわけでも無し……」

唐突に響いた人の声にも取り立て慌てた様子も無く、頬杖を突いたまま、その『声』に対して言い返す青年。

「……あんた、どれだけ騒がしいのが好きなのよ……」

「例えばだ、例えば。俺だってそんな騒がしいだけの催しなんて願いだげだ」

そういつてから、青年は先ほどは嘔み殺した欠伸を窓の外へと吹き付けている。

流れる景色は変わらず原野の園。次の駅までまだしばらくあるのか、列車は速度を落とすようなそぶりは見せない。

ボックス席の向こう側には運転席へ続くドアが見えるが、ブラインドが下ろされており、運転士の姿を伺うことは出来なかった。

すぐ真後ろにも運転席が見えるが、こちらには誰も居ない。ワンマン一車両編成による運行……すなわち……

「典型的な廃線間近のローカル線って感じだよなあ……」

「失礼なことを言わないの。この路線はまだ廃線するようなことは無いはずよ」

何気なく呟いた青年の不穏当な言葉を諷める少女の声。

「イメージだよ、イメージ。お前だってそう思わないのか？」

「……そりゃあ、あたしだって、駅が無人どころか駅舎が無いのはデフォルトで、そもそも駅の周りには集落は絶無、人の代わりにお猿さんでも乗せるのかとか、普通列車が五時間に一本有るかどうかのスカスカ過疎時刻表、電化なんて夢のまた夢の彼方な単独編成の単線気動車全力走行だし……とは思うけど……」

「…………お前の方がよっぽど酷いこと言っている気がするんだが……」

あまりの配慮遠慮の一欠片もない全力全開な暴言っぷりに青年がわざとらしく微かに眉をひそめている。

「……うっ……そ、それはともかく……『こんなこと』、いつまで続ける気なの？ あんたは「こんなこと？」

あからさまな話題転換だったが、それに青年はオウム返しに聞き返したものの、これまで何度も同じやりとりを繰り返していたのか、その表情からはめんどくさそうな感情が窺い知れる。「いつまでこんな現実逃避を続けるつもり？ いい加減にしないと、『あのお方』からも愛想尽かされるわよ。いくら『あのお方』が寛大な方だと言ってもね」

「はあ……別に『あいつ』に愛想尽かされたところで、問題はねえーよ……」

予想通り、いつも通りの少女の言葉が続き、苦々しい顔を外に流れる景色に向けながら辟易した声を上げる青年。

「……ま、今更あなたに何言っても聞きやしないことも百も承知だけどね……」

「ならその無駄な努力はいい加減辞めたらどうなんだ……？」

「あなたが聞く聞かないは些細な問題よ。あたしは『あのお方』からあなたのお目付役を承っている、だから警告する義務はあたしにはある。だけどそれを聞き届けられるかまでの責任は負えない……というところよ」

「……それって最初から責任、凄い勢いでぶん投げてないか……？」

まさに売り言葉に買い言葉、ああ言えばこう言うという典型的なお作法芸を繰り返す二つの声。だがそれは、それだけ気が知れた仲……ということなのかもしれないが。

Arise

2010年 6月19日 初版

ただ、この場に誰か居たのなら、青年が独り言を呟き続けているようにしか見えない奇つ怪な光景に映ったことだろう。
そして、他に誰も居ない車内はこの二人が口を喋つむと、途端に床下から響くレールノイズだけがその場を支配する。

これからはじまる物語は、こんな『二人』がいくつかの出会いを紡ぐ、
小さな物語の一つ――

奥 付

発行元 旅人のザック
著者 風野旅人

URL <http://www.din.or.jp/~tabito/>

E-Mail tabito@din.or.jp

本書の無断複製、複写、転載を禁止します。
※この本の作成には文庫本作成ツール『朱鷺魅』を使用しています。

